

## 2022（令和4）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2023（令和）5年 5月 19日

代表者 佐野 勝宏

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	和文) ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散と文化的適応プロセス 英文) Dispersal of <i>Homo sapiens</i> into the Northeast Asia and its cultural adaptation process			
研究期間	2022（令和4）年度 ～ 2023（令和5）年度（2年間）			
研究領域	（C）移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	佐野 勝宏	東北アジア研究センター・教授	先史考古学	研究の総括
	戸塚 瞬翼	大学院文学研究科・博士課程前期	先史考古学	調査・分析
	金 彦中	大学院文学研究科・博士課程前期	先史考古学	調査・分析
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 30万円		
	外部資金（科 研・民間等）	基盤研究（B）（代表：佐野勝宏）・（代表：佐野勝宏）		[小計] 340万円
	合計金額	370万円		
研究の目的と本年度の成果の概要 （600-800字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。）	<p>本研究は、東北アジアにおける IUP（Initial Upper Palaeolithic）石器群と EUP（Early Upper Palaeolithic）石器群の比較分析を通して、ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散と文化的適応プロセスを明らかにする事を目的とする。東北アジアの IUP 石器群は、レヴァントやヨーロッパの IUP 石器群との共通性が認められ、東北アジア内における共通性も比較的に高い。一方で、東北アジアの EUP 石器群は、他地域の EUP 石器群との共通性は認められず、東北アジア地域内での多様性が高い。このような違いが生じた背景を解明することは、ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散と当該地域における文化的適応プロセスを理解する上で重要である。</p> <p>本年度は、日本列島の関東地方や東北地方の EUP 石器群の調査研究を行った。関東地方や東北地方の EUP 遺跡で出土した石刃接合資料の三次元計測を行い、石刃が剥がされていく工程とその際のコンセプトや技術を解析した。その結果、従来指摘されているユーラシア大陸の IUP とは異なる剥片剥離コンセプトが認められ、IUP 集団のダイレクトな拡散は想定しがたいことが予察された。また、関東地方の複数の EUP 遺跡において、台形様石器、基部加工尖頭器、背部加工尖頭器のマクロフラクチャー分析を行った。その結果、これらの石器に獲物に衝突した際に形成される衝撃剥離が観察された。東北地方ではこれらの石器が狩猟に使われた事がわかっていたが、今回の成果により、関東地方においても同器種が狩猟具として機能していたことがわかった。</p> <p>また、モンゴル科学アカデミーと東京都立大学と共同で、EUP の石器や動物骨が確認されているモンゴルのタルバガティン・アム遺跡の発掘調査と地形測量調査を行った。今回、ドローンを使用した写真測量により、遺跡周辺の地形図を作成することができ、遺跡形成を理解する上で重要なデータを得ることができた。</p>			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	<p>本研究の目的である日本列島の EUP 石器群とユーラシア大陸の IUP 石器群との比較検討は、ホモ・サピエンスの東北アジア及び日本列島への拡散と環境への文化的適応プロセスを理解するうえで重要である。本年度の調査研究により、東北アジア地域の IUP 石器群と比較分析するための基礎データができた。また、本年度行ったモンゴルでの調査研究を通じて、今後モンゴル科学アカデミーや東京都立大学と共同で、モンゴルにおいて EUP およ</p>			

	び IUP 石器群の調査研究を長期的に実施できる見通しがたった。		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など： 1 回	国際会議： 0 回	
	研究組織外参加者（都合）： 10 人	研究組織外参加者（都合）： 人程度	
研究成果	学会発表（6） 本	論文数（1）本	図書（0）冊
専門分野での意義	[専門分野名]	[内容]日本列島の EUP 石刃資料の研究は、実測図や写真等の定性的な説明に終始し、細部に至る全体工程の理解は難しかった。今回の調査では、石刃接合資料を一点ずつ三次元スキャンしたことにより、その製作工程の全体像を視覚的にわかりやすく示すことが可能となり、定量的に評価することも可能となった。また、関東地方の EUP 石器群の狩猟具は形態から類推されていたにすぎないが、今回の調査では証拠に基づいて狩猟具として使われた石器を同定する事ができた。	
学際性の有無	[ 無 ]	参加した専門分野数：[ ] 分野名称[ ]	
文理連携性の有無	[ 無 ]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[ 有 ]	[内容]国際シンポジウム・ワークショップにおいて、研究成果の一部を発表した。	
国際連携	連携機関数： 1	連携機関名：モンゴル科学アカデミー	
国内連携	連携機関数： 1	連携機関名：東京都立大学	
学内連携	連携機関数： 1	連携機関名：文学研究科	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数： 2	参加学生・ポスドクの所属：文学研究科	
第三者による評価・受賞・報道など	無		
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	本年度行った関東地方や東北地方の EUP 石器群の石刃の調査研究は、今後東北アジア地域の IUP 石器群との比較検討を行う上で重要な基礎データとなる。また、関東地方で行ったマクロフラクチャー分析は、既に行われている東北地方の調査成果と合わせ、当該期の主要な石器の機能を知る上で重要である。東北地方ではミクロな使用痕分析も行っており、関東地方でも同様に行っていく。また同時に、東北アジア地域で同様の調査研究を行い、上記の石刃の三次元分析の結果と合わせて総合的に考察することで、東北アジアに拡散してきたホモ・サピエンスの文化的適応プロセスを解明していきたい。		
最終年度	該当 [無]		

**本共同研究に関わる業績（発表予定含む）****[学会発表]**

Totsuka, S., and Sano, K., Methods for identifying hunting traces and its application for early Upper Palaeolithic sites in Japan. *Workshop 2. Recovering Ancient Remains and Reconstructing Past*, Sendai, Japan: October 4, 2022.

Sano, K., Arrighi, S., Vaccari L., Benazzi, S., and Moroni, A. Advanced projectile technology of the earliest *Homo sapiens* in Europe. *Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics*, Sendai, Japan: September 27-29, 2022. (招待講演)

Sano, K., Totsuka, S., Izuho, M., and Morisaki, K., The spatio-temporal patterns of early Upper Palaeolithic assemblages in the Japanese islands, Sendai. *Insights into Human History in the Eurasian Stone Age: Recent Developments in Archaeology, Palaeoanthropology, and Genetics*, Japan: September 27-29, 2022. (招待講演)

戸塚駿翼・佐野勝宏「旧石器時代の東北アジアにおける環境への文化的適応」『東北大学東北アジア研究センター2022年度共同研究成果発表会』、仙台市：東北大学川内キャンパス、2022年6月24日

戸塚駿翼・佐野勝宏「日本列島における後期旧石器時代前半期石器群の時空間分布変遷」『日本旧石器学会第20回総会・研究発表・シンポジウム』、名古屋市：名古屋大学野依記念学術交流館、2022年6月5日

岩瀬 彬・佐野勝宏・長崎潤一・山田昌久・海部陽介 2022「後期旧石器時代前半期刃部磨製石斧の新たな集成」『日本旧石器学会第20回総会・研究発表・シンポジウム』、名古屋市：名古屋大学野依記念学術交流館、2022年6月5日

**[雑誌論文]**

出穂雅実・戸塚駿翼・國木田大・麻柄一志・佐野勝宏 2022. 「富山県富山市直坂Ⅱ遺跡第1・9ユニット出土石器群とAMS年代」『旧石器研究』第18号: 113-124.

**[その他]**

\*ファイル名は KyodoRpt\_年度\_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する（例 KyodoRpt\_2013\_oka1）。